

さ の ち く い せ き ぐ ん
佐野地区遺跡群



宮ノ本12号墳出土「獣帯鏡」

い せ き
遺跡から見た地域のうつりかわり

1. 私たちの暮らしと歴史

この本で紹介する「佐野地区遺跡群」は太宰府市の南西側にある、「向佐野」と「大佐野」という二つの地域で発見された遺跡の総称です。この地域では、昭和62年、以来、土地地区画整理事業がおこなわれ、山や原から新しい町が生まれようとしています。

この地域では長い時間の人の営みが遺跡の形で残されていました。それがここ20年ほどの発掘調査で明らかにされています。

人々が「うつわ」という道具を知らなかった、今から1万年以上昔の旧石器時代から現在にいたるまでのあいだ、同じ地域の中で人々の暮らしはどう変わってきたのでしょうか？そのうつりかわりを知る中で、私たちの今の暮らしはどう見えるのでしょうか。

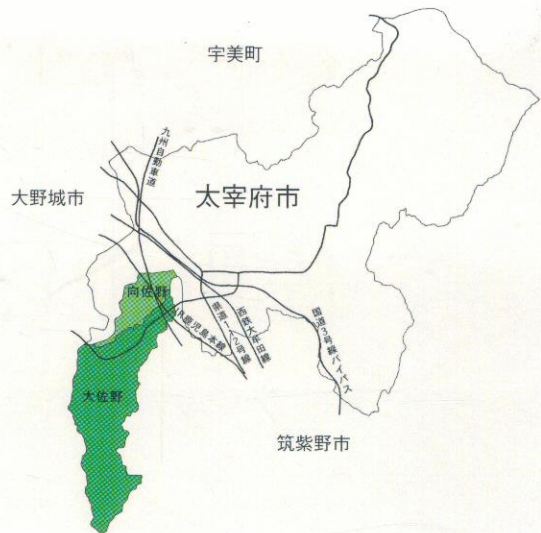


図1 太宰府市の中での佐野地区の位置関係図



図2 佐野地区のようす（1988年）

2. 旧石器時代



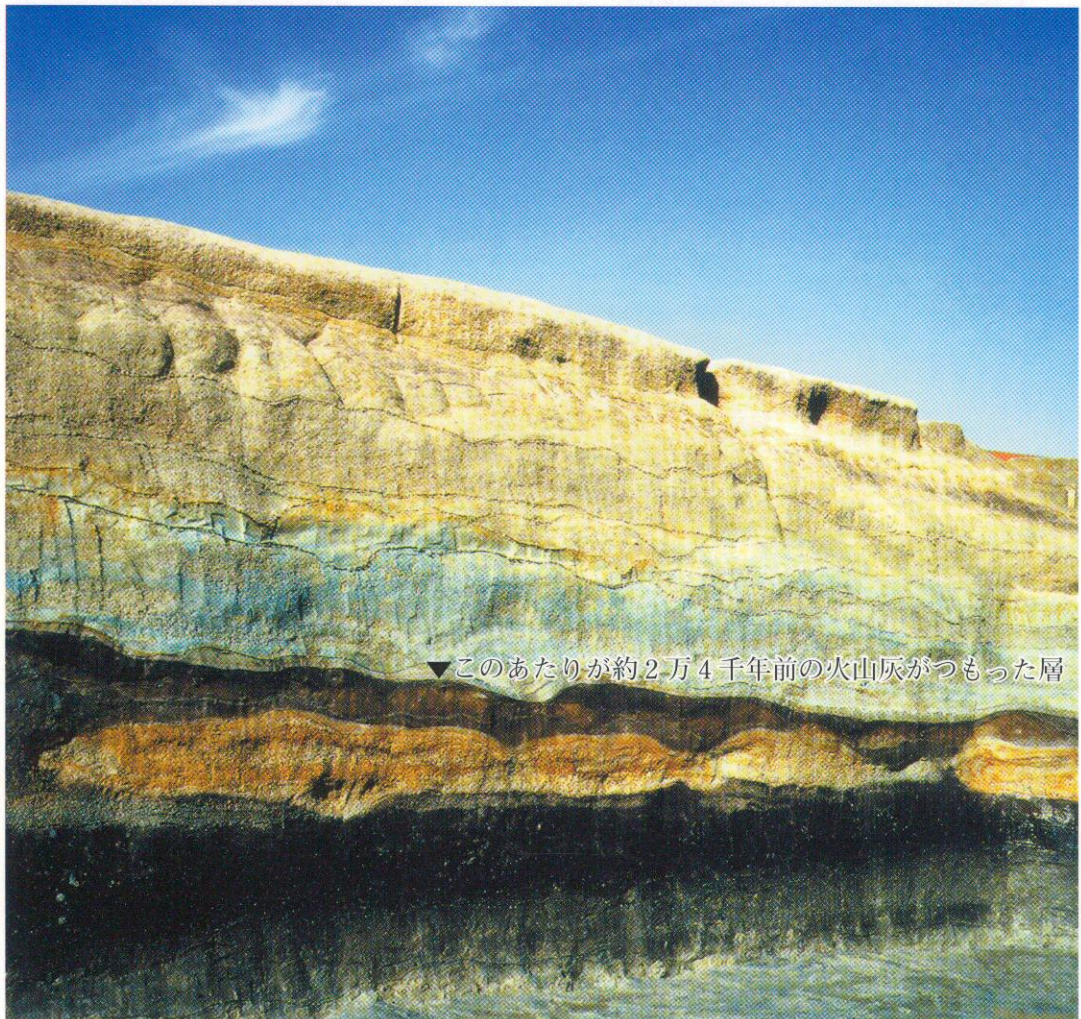
図3 脇道遺跡の石器と破片

「旧石器時代」はおおよそ今から1万2千年前より古い時代を指します。人々はまだ土器を持たず、狩猟や採集によって暮らしをおこない、動物を求めて移動する生活をおこなっていました。

発掘調査で見つかる道具には石器があります。大佐野の脇道遺跡では石器の材料となる石が遠くの場所から持ち込まれ、石器をつくっていたと考えられます。黒曜石（黒いガラス質の石材）や安山岩の破片やくずが1500点くらい発見されました。なかには水晶でできたものもありました。ねらったえものは何だったのでしょうか？

旧石器時代の後半には熊本の阿蘇山の活動による火砕流が太宰府を含む福岡平野をおそったり（約8万年前）、鹿児島^{あいら}の始良火山の灰が地面をおおう（約2万4千年前）など天災がくり返されたようで、このことを示す土の層も見つかっています。

図4 脇道遺跡の土層



▼このあたりが約2万4千年前の火山灰がつもった層

3. 縄文時代 じょうもんじだい



図5 カヤノ遺跡出土の縄文土器

「縄文時代」はおおよそ今から1万2千年前から弥生時代がはじまる紀元前4世紀頃まで続いた時代で、関東地方では縄を使った模様が入れられた土器が出土するため「縄文時代」とよばれています。しゅりよう旧石器時代に引き続いて動物狩猟と植物採集のために移動する生活が多かったと考えられています。

太宰府市内でもほうまんざん宝満山周辺や太宰府天満宮てんまんぐう周辺やこの佐野地区などの小高い丘やその斜面でこの時期の土器や石器が確認されています。



図6 原口遺跡で出た様々な石器

縄文時代の終わり頃には「くわ」と考えられる石器の刃先が出土し、丘では焼き畑などの農耕のうこうがおこなわれていたと考えられます。向佐野の原口遺跡では村から作業に来た縄文人がキャンプをしたと考えられるたき火の跡と土器が見つかっています。また、向佐野の前田遺跡では縄文時代終わり頃の地面にあなを掘った住居たてあな(竪穴式)が発見され、小さな村があった可能性が考えられます。



図7 前田遺跡の縄文の住居跡

4. 弥生時代やよいじだい



図8 佐野地区出土の弥生土器

紀元前3世紀頃（今から2300年前）に中国大陸から現在でも行われている、水田に稲を植えて収穫する技術が伝えられました。水田を維持するために、多くの人が長い時間協力し合わなければなりませんでした。そのため水田の周囲には多くの人が共同生活する必要が生まれました。その結果、人々は同じ土地に長く住みつくようになり「ムラ」ができ、その「ムラ」が集まり「クニ」ができました。稲を植えて農業を始めたこの時代を、「弥生時代」と呼んでいます。

弥生時代は土器の移り変わりから前期、中期、後期に区分されています。志賀島で発見された中国「漢」の王から、当時のこの地域のクニの王がもらった「金印」は中期のものとされ、女王「卑弥呼」は後期から古墳時代にかけての人物といわれています。



図9 前田遺跡の弥生時代集落

佐野地区では、前期の「ムラ」が向佐野原口遺跡と前田遺跡で、後期の「ムラ」が大佐野の尾崎、籬川、フケ遺跡や向佐野前田遺跡で見つかっています。

ちょっとひといき（ことばのいみ）

遺跡＝「いせき」・・・むかしの人の生活の跡です。

遺構＝「いこう」・・・遺跡で見つかる生活の跡の1つ1つのこと。井戸、建物、溝、お墓など色々な種類にわけられます。

遺物＝「いぶつ」・・・むかしの人が遺跡に残したすべてのものです。
特に食器などがよくでています。



図10 前田遺跡の前期の住居

中央に一本の柱の跡があり壁ぞいに掘られた溝の中に小さな穴が並び、屋根を支えた柱の痕跡と考えられます。

中央の柱の根元に、火を焚いたため赤く焼けた跡が見られます。

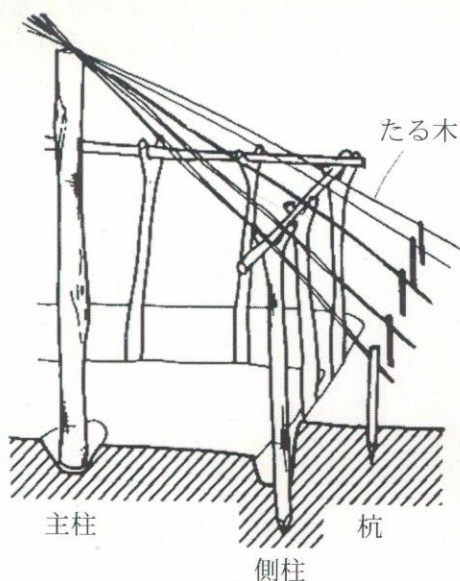


図12 前田遺跡の前期の住居復元予想

図11 前田遺跡の貯蔵穴

人がすっぽり入るほどの大きさ。住居1軒に一つずつ程度の割で見つっています。稲穂や種などが見つかる例があるので、食物を貯蔵しておく施設と考えられます。



図13

原口遺跡の円形の住居

住居の形が円形をしています。これは朝鮮半島によく見られるやり方のため、稲作とともに多くの生活習慣や技術が大陸からもたらされたことが分かります。





図14 前田遺跡後期の住居

後期から古墳時代にかけての竪穴住居は長方形になっており、内部にはベット状遺構があることが多いです。屋根を支える柱は二本柱構造でまんなかに炉があります。



図15 雛川遺跡^{しつち}の湿地で出たカゴ

ムラの周辺にあった河川が枯れたあとにできた湿地は、農機具や建物の柱材^{はしらぎ}などが乾燥しないように一時的に木製品が仮置きされていました。雛川遺跡では集落の移動などによって取り出されずにそのまま製品が残されていたようです。
(写真は湿地で出土した「網かご」^{あみ})

図16

雛川遺跡のどんぐりの穴

稲作は豊かさをもたらしますが、時には台風などで収穫^{しゅうかく}できないときもあったようです。ムラの人々は非常用として、せっせとどんぐりを拾い、虫が付かないように地面に穴を掘って水につけて保管していました。



図17 前田遺跡の後期^{かめかん}の甕棺

弥生時代の終わり頃には住居の数に対して墓の数が少ないことから限られた人のみが埋葬^{まいそう}されたと思われます。

この墓とほとんど同じ時期には西側の宮ノ本丘陵では「古墳」が造られるようになりました。



5. 古墳時代^{こふんじだい}

弥生時代のクニは旧郡（ここでは筑紫郡）から現在の市町村程度の大きさだったと考えられていますが、古墳時代にはこれらの地域がさらに強い権力のある勢力によって統合され、ついには大和地域の豪族が関東から九州までに力を及ぼす国家を作りました。全国のそれぞれの権力者が古墳を盛んに造ったため古墳時代と呼ばれています。

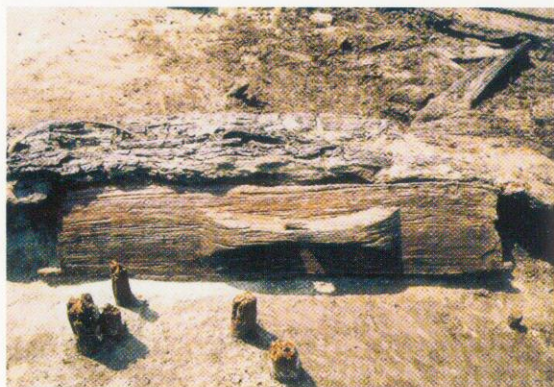
佐野地区では宮ノ本丘陵の東南側に早い時期から古墳が複数造られました。宮ノ本12号墳からは中国後漢からもたらされた虎や龍の文様を持つ「獸帶鏡」^{じゅうたいきょう}と呼ばれる鏡が出土しています（表紙の写真）。



図18 宮ノ本12号墳の遺体が納められた棺の跡



図19 尾崎遺跡（6次）の集落



大佐野では尾崎遺跡から京ノ尾、カヤノ遺跡という順で時代が新しくなるにつれ、谷の奥に集落が移る様子が知られるようになりました。

図20 おさき 尾崎遺跡の倉庫の扉

5世紀の^{しっち}湿地に造られたマス状の施設に利用された板に倉庫の^{とびら}扉が再利用されていました。栗の木から一つ一つ削って造られたもので、倉庫が解体された後も捨てられずに大切に利用された様子がうかがわれます。

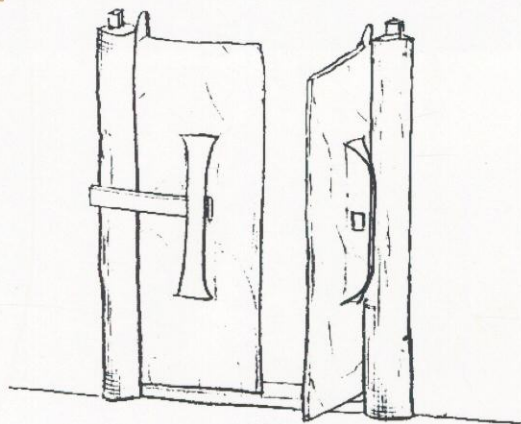


図21 扉の復元図

6. 古代（奈良・平安時代）

およそ1300年前、日本を「律令」という法律によっておさめる政治のしくみができました。そして太宰府市には、市の名前の由来である「大宰府」という役所がおかれます。

大宰府は日本の外交の窓口として、また九州（当時は「西海道」といわれた）全体をまとめる役所としておかれたもので、平安時代の終わりまで機能しました。

このころの佐野地区には、大宰府と都をつなぐ公的な道路である官道が通り、その道沿いに役所が置かれました。

また、大宰府の街（大宰府条坊跡と呼ばれています）を望む丘の上には、大宰府につとめた役人の墓や役所で使われる土器を焼いた窯がつくられました。

a 大宰府役人の公の墓地 宮ノ本遺跡と「買地券」



図22 宮ノ本遺跡の官人の墓

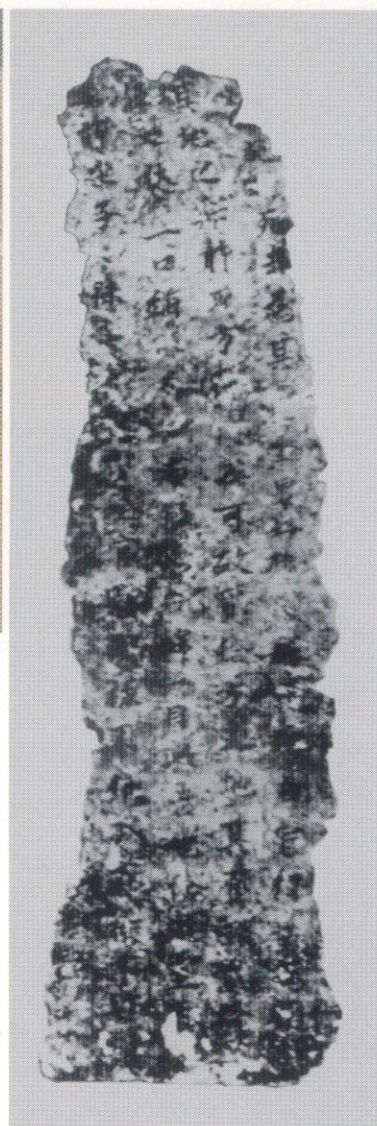


図23 「買地券」（赤外線写真）

【読み下し文】
 ・．．に死去した。靈魂の座する墓地として、息子の好雄は、自宅の□□の方角にある（親に）ゆかりの地で（現世霊界を通じて）静寂の地があるため、その土地を買うことにした。その値は、錢二五文、鍬（すき）一口、絹五尺、調布五端、白綿一目である。このよい土地を得たことで御霊は安心して心静かに居られ、子々孫々まで繁栄をもたらしてくれるであろう。

【買地券銘文】
 有□□戊□死去為其□坐□男好雄□縁之地自宅□□方其地之寂靜四方□□可故買給方丈地其直錢貳拾五文鍬一口絹五尺調布五□白綿一目此吉地給故靈平安靜坐子々孫々□□全官冠□祿不絶令有□七珠
 ．．．白

b 古代官道

幅が約10mもある大きな道で、中国や朝鮮半島からの外交使節の宿泊所であった
筑紫館・鴻臚館つきのむろつみ こうろかんが置かれた現在の福岡市中央区の福岡城跡付近から、太宰府市の水城西



図24 前田遺跡の古代官道（写真奥は水城西門）

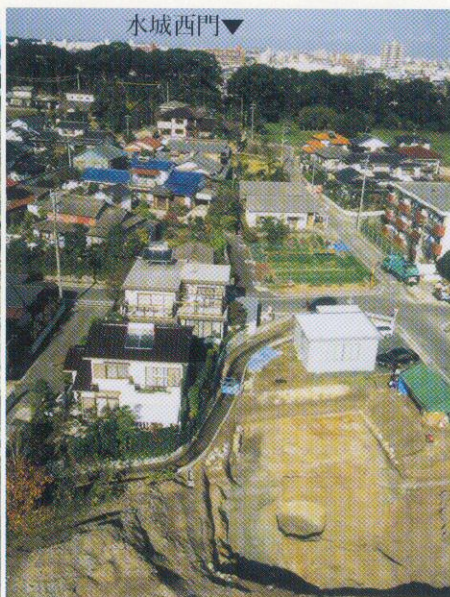


図25 島本遺跡の古代官道

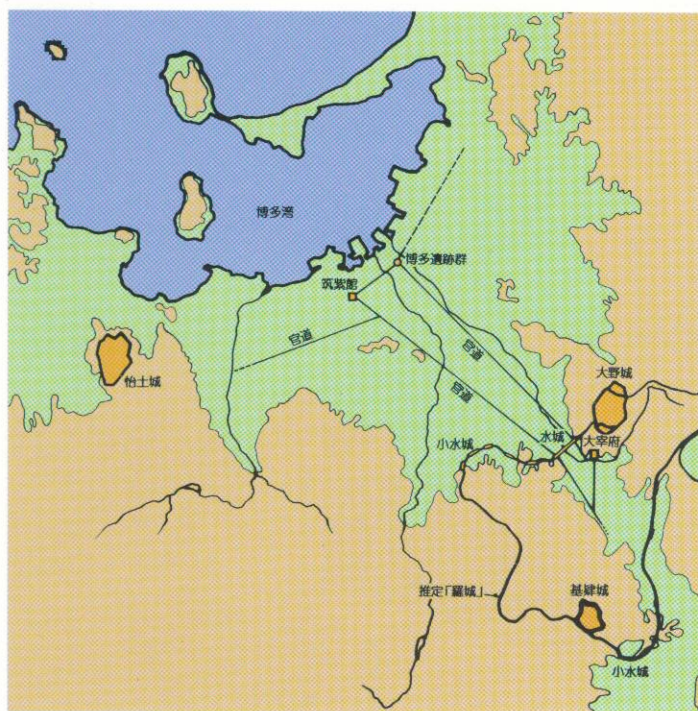


図26 福岡平野の古代官道ルート

門・島本遺跡・前田遺跡をと
おり、二日市湯町付近にむか
ってほぼ一直線につくられて
います。

このような大きな官道は全国的に整備されており、九州内では佐賀や熊本、さらに最近では東北地方にいたる全国でもみつかり、地方からの道が奈良の都であった平城京につながっていたことが証明されました。



図27 宮ノ本遺跡4号窯

c 須恵器の窯跡（宮ノ本遺跡）

太宰府の南の牛頸山を中心とした丘陵では、古代に窯業がたいへん盛んで、須恵器とよぶ焼き物を作っていました。この窯の一部が宮ノ本遺跡でもみつかっています。

ここでつくられた焼き物は主に大宰府で使われていましたが、一部は奈良の都に税として運ばれたことも知られています。

d 古代の役所建物（久郎利遺跡、
原口遺跡、前田遺跡）

旧道の向佐野の交差点付近には、掘立柱建物がまともに発見されました。見つかった建物はその配置に規格性があり、また東西南北をきちんと向いていることから、当時の役所とみられます。佐野地区や道路の管理に関係していたと考えられます。



図28 久郎利遺跡の建物群

e 集落と遺物（カヤノ遺跡の掘立柱建物群、脇道遺跡の木簡）

大佐野地区の集落は、古墳時代の終わり頃から、川沿いの丘の斜面に住むようになります。住宅は穴を掘って造る竪穴式が主ですが、中には掘立柱建物を構えるものも登場する。村には文字を書くことができる人も住んでいたようです。



図29 カヤノ遺跡の掘立柱建物群



図30 脇道遺跡の木簡

7. 中世・近世

中世は開発の時代で区画整理が始まる前まで見られた風景は、ほぼこの時期に出来上がっていたようです。また、三度の食事をする生活習慣などもこの時期に始まったといわれ、食生活に関しては煮物をする鍋、練り物や摺りものための鉢、揚げ物のための浅い鍋など現代とさほど変わらない食生活を想像できる道具が遺跡から出土しています。

佐野地区では武士の勢力争いが激しくなった戦国時代には、「和久堂城」や「尾崎城」、「佐野之城」という城があったことが古文書などに記されており、現在伝わる地名の中に「馬場」、「城戸」、「たかじょう」（今の筑紫農協の場所）、「ひくじょう」（今の加藤田外科病院の場所）などの城に関する地名が残されています。城の本体は現在の福岡農業高校の場所にあった推定されていますが、残念ながら造成によってなくなってしまいました。

また、お墓や古文書から現在住まれている人々のご先祖が、江戸時代にはすでに佐野地区に住んでいたことがわかります。



図31 「佐野之城」の現状

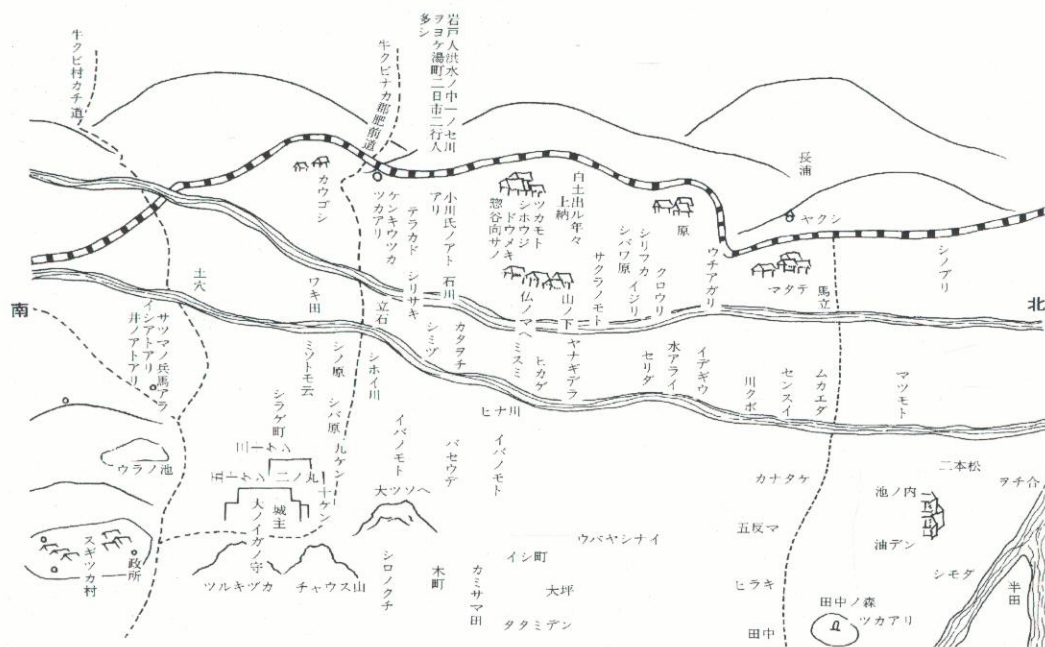


図32 「太宰府旧跡全図」に見られる江戸時代の佐野地区の地名

8. 現代から未来へ

佐野地区は、昭和の中頃まで田圃と住宅が程よく調和した静かな町でしたが、その後、県道福岡筑紫野線や九州縦貫自動車道が開通し、昭和50年代から始まった区画整理によってその風景は農村から商業地へと変わりました。今となっては何気ない風景写真も貴重な文化財となり、私たちに太宰府の過去と未来について語ってくれます。



図33 むかしの風景 1

(大佐野、1979年)
宮ノ本丘陵（現在の太宰府西中学校付近）より大佐野交差点を望む



図34 むかしの風景 2

(前田、1983年)
向佐野農協南側付近より西側の県道（5号線）方面を望む



図35 むかしの風景 3

(宮ノ本、1990年)
福岡農業高校の東側付近より西側の長浦台方面を望む



図36 佐野地区遺跡マップ



図37 ^{だざいふきゅうせきぜんず}「太宰府旧跡全図」(江戸時代終わり頃)の佐野地区

目で見える太宰府市の文化財 3
佐野地区遺跡群

2000年3月

製作：太宰府市教育委員会 文化財課

印刷：(有)システム・レコ